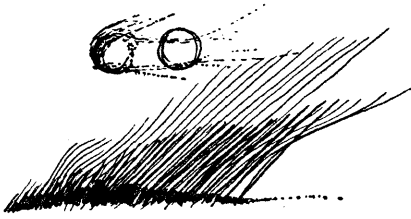


近代短歌に現われた子ども(四)



大塚 雅彦

(9) 北原白秋

北原白秋(本名隆吉)は明治十八年、福岡県山門郡沖端村(現柳川市)の酒造業者の長男として生まれたが、その生家は今は記念館として公開され、水郷柳川の観光名所の一つのようになっている。私も数年前に行つて見学したが、旧家のトンカ・ジョン(柳川方言で、大きな坊ちゃん)としてここに幼少年期を送つた白秋の息吹きが随処にたちこめていゝうな気がした。彼は「明星」「スバル」で活躍し、詩集『邪宗門』(明治42)、『思ひ出』(明治44)によつて詩壇に知られ、また、歌集『桐の花』(大正2)によつて歌人としての地位も確立し、以後、昭和十七年に没するまで、詩・短

歌・歌謡・童謡等、さまざまのジャンルにわたって幅広い活躍をし、絢爛たる才能を発揮したが、その生涯の全著作は約二百冊にのぼるといわれる。しかし、アルス版『白秋全集』全十八巻（昭和4・9）があるものの、これは完全ではなく、完全な全集が未だに刊行されていないのは、甚だ残念である。歌集だけ見ると、『桐の花』から、『牡丹の木』（昭和18年、没後の刊）に至る計十一冊がある。

①病める児はハモニカを吹き夜に入りぬもろこし畑の
黄なる月の出

②ほそぼそと出臍でせその小児こども笛を吹く紫蘇の畑の春のゆう
ぐれ

③石崖いしがきに子ども七人腰かけて河豚かまぐりを釣り居り夕焼小焼
①と②は処女歌集『桐の花』所収。この歌集はフラン
ス印象派の感覚や象徴派の官能を盛り、気分や情調やセ
ンチメントを尊重したユニークな詠風を示したもので、
抄出歌集などもきわめてエキゾチックな雰囲気を示した
作品である。①について若山牧水は、広漠たる平原の中

のもろこし畑に一人の病児である少年が住んでいて、昼
間から只一人ではほそぼそとハモニカを吹いていたが、
既に夜になろうとするのに向に気もつかぬげに吹き続
けている、という風に解している。しかし、木俣修博士
は「田園の中のもろこし畑でもよいと思う」とし（同氏
著『白秋研究1』昭和29・11）、和田繁二郎教授は「病め
る児の居場所ははっきり出されていないが、窓に寄っ
て、窓外のもろこし畑を眺めているものと思われる。：
：もろこし畑はおりから夏のさかりとて、高く伸びた円
錐形の穂や葉の群れが月の出の空にシルエットをなして
いる。そこへ黄色い大きな月が昇るのである。この背景
だけでも、夜への序曲としてのロマンチックな詩情が感
じられるのであるが、そこへハモニカを吹きやまない病
児を配して、童画的な憂愁を深めている」（『現代短歌評
釈』の同氏担当部分、昭和41・2）と述べている。これは
牧水の解よりも和田説の方がよいと思われる。

②は今度は出べその小児を配しており、ハモニカで
なく笛であり、もろこし畑でなく紫蘇の畑である。季節

も①の如く夏の夕ではなく春の夕である。木俣氏はこの歌について「病的なものに官能美を見出したものとして、明治四十年代の白秋の一方向を示すものである。

〈出臍の小児〉と〈紫蘇〉、ここに異常で鋭い作者の感覚と官能が見られる」(同氏著『北原白秋』昭31・3)と述べているが、それは①の歌にもあてはまることであろう。藤森朋夫氏は「もろこし畑と黄なる月、これには一種の異国情調さえ感ぜしめる。この環境にハモニカの音を加えることによつては、なおさらにである」(同氏著『近代秀歌』昭34・9)と評している。いずれにしても、これらの歌は白秋が開拓したまことに独創的な世界である。

③は第二歌集『雲母集』(大正4)所収。「山海経」と総題をつけた歌編のうち、「海峡の夕焼 庭前小景」中の一首である。大正二年五月、白秋一家は神奈川県三浦三崎に移って魚類仲買を業とし、父母たちが東京に引きあげた後も、白秋夫妻は翌年二月まで留まって生活した。これはその折の作であろうか？歌は別にむずかしい

意味はなく、七人の子供たちが夕焼け空の下で、腰かけて河豚を釣っている光景をうたっているのだが、河豚という珍らしい魚を素材にしていることや、「夕焼小焼」ということばで童謡的なムードを出している。『雲母集』にはこの種の童謡・民謡的リズムが少なくないのも特色である。後年開拓した白秋の童謡的な素材が早くも現われているわけだが、但しこの「夕焼小焼」は中村雨紅の同名の童謡や三木露風の「赤とんぼ」からきているのではなく(これらが作られたのは、もっと後のことである)、恐らく「夕焼小焼あした天気になあれ」という子供のことを生かしたものだろう、と本林勝夫教授は述べている(同氏著『現代短歌』昭41・11)。

④夏浅み朝草刈りの童らが素足にからむ犬胡麻の花

⑤鞠もちて遊ぶ子供を鞠もたぬ子供見惚るる山ざくら

花

⑥女童は繁に咳き入る寒き夜を小糠小星も風に互えに

き

⑦女の童朱の蠟とぼしあえかなり颯風の夜の父に持て

来し

④は第三歌集『雀の卵』（大正10）所収。「三谷に移る」の七首中、「向う土堤」と題した一首。三谷は東京府下南葛飾郡の小岩村三谷（現江戸川区）であり、大正五年六月末に作者は千葉県東葛飾郡真間から此処に移り、そこで第二の妻江口章子と共に新しい生活に入った。その住居を紫煙草舎と名付けて（現在、これは千葉県の市川市の里見公園内に移築され、公開されている）貧窮ながら「閑寂三昧に入った」（同歌集序）のである。このあたりは今は繁華になり、むろん昔のおもかげはないが、その頃は自然風景に恵まれた田園であったことが④の歌でわかる。子供たちが素足で、朝露に濡れた草を刈る初夏の光景も見られたわけである。犬胡麻は唇形草科の多年生草本で、茎は方茎で粗毛があり、葉は対生で鋸歯があり、夏には淡紅紫色の唇形花を沢山つける。「夏浅み」は語法からいえば「夏が浅いので」だが、そう訳すと下の句とのつづき工合で不自然だから、「夏がまだ浅い頃に」と軽く訳した方がよい、と谷馨氏は述べている（同

氏著『現代短歌精講』昭28・12）なお、谷氏はこの頃白秋が作った民謡に

早やも出ましよぞ、

朝草刈りに、ヨウ、

さまの裏ん戸の

裏土手を。スイスイ

というのがあるのを挙げていますが、併せて鑑賞の参考になる。

⑤も『雀の卵』から抄出。「春日遊楽」一連の中の一首である。東京芝公園の増上寺に母と花見に行った折の作で、その前の「麻布山」の一連にも「垂乳根と詣でに來れば麻布やま子供あそべり御仏の前」の如く、子供をうたった作品がある。「春日遊楽」と「麻布山」の間に「童と母」と題する長歌があり、作者が童心に返って母の恩頼に感謝する情をうたっており、⑤も「古今集的な整いの中に、童心が輝くように感じられるのは、母と居るときの作者が、対象の子供と同一化しているゆえである」（島田修二・田谷鏡『北原白秋』昭57・5）という。

田谷氏は、「白秋の気持は（鞠もたぬ子供）のほうにあるようだ」と言うが（同書）、木俣修氏は、鞠もたぬ子供と鞠もちて遊ぶ子供と二つの姿態を渾然と一つの大きな景象の中心に融け込ませていて、作者の愛情は鞠もたぬ子だけでなく両方の子供たちに等しくそそがれているのである、と指摘している（同氏、前掲『北原白秋』）。

⑥は第六歌集『白南風』（昭和9）所収。「ある母と子」と題する七首中の一首。詞書によると、寒夜、日暮里駅のベンチで相抱き、暁に汽車を待つ母と十一、二才の少女が居て、子は雛妓の見習に上京中、肺患になり母の迎えを受けて帰郷するところであった。哀れなので家に連れてゆき一夜を泊めてやったが、後にその子が死んだ、という報知が来た、という。白秋のヒューマニズムを示す作品だが、寒空の風に小糠星が冴える夜に、はげしく（繁に）咳き入っている幸うすき少女を描出して、胸をうつものがある。⑦は第九歌集（没後刊）『椽』（昭和18）所収。新幽玄体を目指した作者の昭和の象徴歌風が結晶した歌集だが、抄出歌なども、朱い蠟燭を少女が

台風の晩に、父である私のところにもして持ってきたというもので、緊迫した状態の中にも美的な、極めて印象的な作品である。この女童は長女篁子さん（大正14年生、『椽』の作品が作られた頃は小学校上級生くらい）であらう。「あえか」は、かよわく、なよなよしたさま、たおやかさまの意。

(10) 石川啄木

石川啄木についてはこんにち、その伝記は岩城之徳博士の『石川啄木伝』（昭30・11）を始めとして、不明のところが多くないに近いほど委細調べつくされ、また、その研究もおびただしい数にのぼり、汗牛充棟といつてよい啄木研究の整理が必要である、とすらいわれる。私自身もかつて幾つかその種のものを書いたことがある（例えば拙稿「石川啄木と『明星』」、「国文学」昭39・12号、同「啄木研究の展開——啄木像定立への足どり」、「短歌」昭41・10号、同「教師啄木」、「啄木研究」

7号（昭57・1等）。啄木の評価についてもこんにち偶像化、神格化しかねまじき崇敬や讚美が捧げられる向きもあるが、それだけに、歪曲されたり誇張されたり伝説化されたりしやすい。その危険を抑えて、正しい評価をすることがいつも必要であると思われる。

①真剣まけんになりて竹もて犬を撃つ小児せうにの顔をよしと思へり

②あはれかの我われの教へし子等こらもまたやがてふるさとを棄すてて出づるらむ

③子を負ひて雪の吹き入る停車場ていじやばにわれ見送りし妻の眉まゆかな

④かなしみの強くいたらぬさびしさよわが児のからだ冷えてゆけども

いずれも歌集『一握の砂』（明治43）より抄いた。岩城博士は「啄木は少年時代から物事に対してはげしい情熱を示したが、北海道より上京後は生活の窮迫から自己批判的になり傍観者的になって、その短歌も自己愛惜の歌が多く、それが快い詠歎になり甘い感傷となって彼の

短歌の特色を形づくっていた。しかし犬を打つ子供の真剣なまなざしと動作に久しく失われていた一連の情熱を思い出してこのように歌ったのであろう」と、ていねいな鑑賞をしている。②については啄木の渋民小学校における教師生活を詳細に知る必要がある（前掲「啄木研究」7号（洋々社）の拙稿参照）が、同校における約一年間の彼の代用教員生活は極めて熱心で情熱的なものであったことは、よく指摘されるところである。しかし、その熱心に教えた子供たちもやがて、自分と同じように故郷を棄てて他国に出て苦難の道を進むであろうという歌で、その背景には、故郷の貧しい現実のすがたや、故郷喪失ぼうしの身である啄木自身のなげきとが、オーバーラップされて投影されている、と思われるような歌である。この歌の次に「ふるさとを出で来し子等の相会あひあでよろこぶにまさるかなしみはなし」という作品もあり、併せて味わうとよい。

③は有名な歌である。流浪の詩人啄木とその一家を偲しのばせる哀切な作品だ。啄木は明治四十一年一月、釧路新

聞に入社決定し、十九日単身赴任すべく小樽駅を出発した。その日の日記に「予は何となく小樽を去りたくない様な心地になった。小樽を去りたくないのではない、家庭を離れたくないのだ」と書いている。妻節子は長女京子(当時、満一才くらい)を負い、心細さに堪えて雪の吹き入る駅に夫を送ったのであり、この不幸な若い夫妻の生涯を象徴するような一首ではなかるうか。なお、啄木は「わが友は今日も母なき子を負いかの城址にさまよえるかな」という歌を、それから二年数ヶ月後に作っているが、母なき子を負うて盛岡の不来方城址をさまよる不遇な友人を思いやっている。身につまされたのであらうか。啄木の長男真一は明治四十三年十月四日に誕生したが、その月の二十七日に死去してしまった。それを歎いたのが④をふくむ一連の歌であり、『一握の砂』の末尾を占める哀切な作品である。「夜おそくつとめ先よりかへり来て今死にしてふ児を抱けるかな」から始まり、始めて生まれた男の子を忽ちに失った絶望的な悲しみを綴った歌が八首並んでいる。④は、わが子の亡骸が

次第に冷たくなってゆくのに、悲しみが強く迫って来ないさびしさという複雑な、茫然自失の思いを述べているのであらう。

⑤遊びに出て子供かへらず、取り出して走らせてみる玩具の機関車。

⑥子を叱る、あはれ、この心よ。熱高き日の癖とのみ妻よ、思ふな。

⑦まくら辺に子を坐らせて、まじまじとその顔を見れば、逃げてゆきしかな。

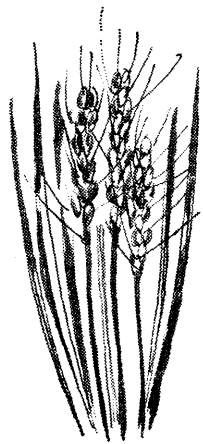
⑧その親にも、親の親にも似るなかれ——かく汝が父は思へるぞ、子よ。

いずれも啄木の死後刊行された『悲しき玩具』(明治45)所収。本歌集所収歌はすべて、『一握の砂』のそれと異って、同じ三行書きでも抄出歌の如く句読点がつけられているのが特色である。⑤は遊びに出て帰って来ない子供を待つ父親の所在なさをうたったもので、この子供は当時五才の長女京子である。⑥も歌意は明瞭だが、この頃既に啄木は明治四十四年二月四日、慢性腹膜炎で大

学病院青山内科に入院、三月十五日退院、しかし肺結核が進行し衰弱加わり、七月高熱を発して病床に呻吟……という状態をくり返していたのであって、死の直前であった。加え、妻節子も肺炎カタル、母カツも肺結核（翌四十五年死亡）という惨澹たる状況であった。この歌は日頃の不遇や志を得ぬ口惜しさ等を、自嘲をこめて啄木が歎いている感があるが、歌人渡辺順三の「ただ病気のために気が焦立って叱るのではない。自分の不幸だった過去を顧みて、せめて子供にだけはもっと幸福な生涯を送らせたいと思ふ心で一ぱいなのだ。それを思つて俺は子供を叱る」という解釈の方が奥深いと、岩城教授も述べている（別冊国文学NO. 11『石川啄木必携』昭56・9）。⑦はほのかにフモールが漂っているが、やはり死に近い啄木の姿を想像すると、単純には思えなくなる歌だ。『悲しき玩具』のこの歌の前後には子の成長を驚いたり、子の将来に思いを致したりしている作品が数首並んでいる。⑧も人口に膾炙した作品だ。親である自分にも、そのまた親つまり祖父にも似るな、と子に願う父親

の心理は、悲痛である。自分や父親の不幸で悔多い生活を想い、わが子の将来に対してだけは違った人生を期待する親心は、せつない。それは一面、自分や父親の敗北と挫折の人生を自認することでもあるからだ。ちなみに啄木の父親石川一禎和尚は、学識はあったようだが、意志弱く、処世が下手で、困難な事態に直面すると家出するような逃避的生活をし、一家の家長としての自覚乏しく、結局息子の啄木を失望させたり、啄木に負担をかけたこと、伝記が伝える通りである。

（付記、啄木の歌はいずれも歌集では三行書きになっているのだが、ここでは便宜上、普通の二行書きの体裁に直して記した）



（お茶の水女子大学）